

岩崎雅について、吉岡まさみのブログから引用する。「美学校で写真を学び、今は早稲田大学で建築の勉強をしている。今回が初個展。楕円形のパネルに写真が貼ってある。今回は12使徒にちなんで12人のモデルを飾った。日本人の男でキリストに似た人をいつも探している。どんどん撮って行けば、日本人が想い描くキリスト像が浮かび上がってくるのでは？」と岩崎は考える。」



私は美学校出身の柳川たみに岩崎を紹介され、岩崎のモデルとなった。ステップスギャラリーで撮影したことが縁となり、今回の展示が実現した。岩崎がキリスト教徒であるのか尋ねなかったが、撮影の際には言われるままに従った。岩崎は外面的なポーズを要求するのではなく、モデルの内面を掬い取ろうと努力しているように感じた。言葉と言うよりも概念を与え、モデルに想起させ、その一瞬を逃さないように、自ら限定しているのかと思わせるほど、シャッターを押す数は少なかった。岩崎がアナログカメラを使用している点にも注目したい。現像しなければどのように写真が映っているか判らない。ここに掛ける岩崎の執念と、ストレートフォットの在り方を重要視すべきであろう。



モデルの普段と、キリストへの変容の両方を撮影していた。そのため、展示されている写真は二枚で一組となっている。

岩崎は作品名を《てんけい》とした理由を、パネルにして画廊入り口に貼った。「木村君ってキリストに似てるよね。／え！そうだったの？／友人の木村君が12月24日生まれだったから／天啓を受けた私が始めることにした／典型的なキリスト顔の蒐集」。些細な日常である。この些細な出来事を、天啓と典型を掛けている訳だ。それでいいと思う。動機に対して、現代美術は過敏に成り過ぎている。この傾向が商品カタログに繋がり、概念と懸離れていく。

展示は12使徒の壁面と、向かいの壁面のみを使用した。入口扉直ぐの壁面には《Stigma》というインスタレーションを行った。スティグマとは刻印を意味し、ネガティブな印象を与える。それを表すように岩崎は釘を用いているのだが、却って立ち会う者に柔らかな印象を与えている。



岩崎は今後もキリストに似た者を探し求め、撮影を続けることであろう。アナログカメラを用いたキリストという最大公約数のイメージと実体の模索と錯誤は、シュミラークルとフェティシズムに覆われた現代社会に対する闘争に化けるまでの力を携えている。W・ベンヤミンは「人間が写真から姿を消したとき、そのときはじめて展示的価値が礼拝的価値を凌駕することになった」（『複製技術時代における芸術作品』）と記している。この復権を唱えることも不可能ではないだろう。

岩崎は写真の支持体、展示形態をどのように工夫するかによって、自らの長所が変質していくことになるだろう。